

## 問いを持つための知識

2020年前後ことを思い出すと、AIの普及下での教育を語る際に、「人間にしかできないこと」が重視され、その一つとして創造性に言及する場合も多かったような気がする。しかしその後、生成AIの急速な進歩が私のような門外漢にも明らかとなり、AIを用いて作成されるとされる画像や音楽、映像作品を見せつけられると、創造的な活動が人間にしかできないことだとは、単純には言いづらいような感じになってきている。またAIが解いたという数学の問題のレベルもどんどん上がっていく状況を見ると、問題を解く力の点でもAIに既にかないそうもない。

最近(2026年)は、人間にしかできないこととして、問いを持つことをあげる記事を目にするようになってきた。AIが新たな問いを持つことはできないのか、あるいは問いを持つことはAIの原理からも難しく、将来的にも問いを持てるようになる望みが薄いのか、そのあたりは素人にはわからない。ただ、創造性が重視された時と同様、問いを持つことを過度に重視するあまり、既に確立された知識を学んだり記憶したりすることをあまりにも軽んじるような論調になってしまうのは、よくないように思われる。

脳機能障害の研究者である山鳥重先生は、著書「『わかる』とはどういうことか」の中で、知識の網の目の重要性を述べている。知識の網の目ができることで「何がわかっていて、何がわかっていないのかがはっきりするようになる」とし、それにより何かを目にした時に「網の目に変なものをひっかけてくれる」(p. 186)。逆に「まったく何も知識がなければそもそも網の目が出来ていませんから、網にひっかけること自体が出来ません。すべてのものは網を遠くはずれたところをどんどん流れていってしまいます」(p. 187)。これでいくと、ある状況で問いを持つためには、その状況に関わりそれなりの知識があり、それに関わる網の目ができている必要があるのだろう。

何かについて問いを持つという場合、その「何か」についてもある程度理解している方が、よい質の問いを発することができる、という側面もある。以前に[数学の問題を解く生徒のようすを分析した際に](#)、最初は問いを持つこともなかったのが、問題場面を作図ツールを用いて探求する中で、この条件だけでなぜこの長さが等しくなるの?といった重要な問いを持つようになり、解決が大きく進

展するという流れが見られた。「何か」を探求し、「何か」についての理解が深まるのが、よい問いを持つことを支えるのだと考えられる。「正しく問うことができれば、問題の半分は解決したも同然」ということも言われるが、正しく問うには問題に関わる対象についてある程度理解している必要があり、その理解のためには問題や対象の周辺についての知識を持ち、知識の網の目を持っている必要があるのではないだろうか。

以前見た番組で、ポツダム市のヒロシマ・ナガサキ広場の様子が紹介されていた。広場の前の建物がトルーマンが滞在した建物であり、原爆の投下命令が出された7月25日には80年目に合わせた集会が行われていた。その際にインタビューを受けた女性が、次のように語っていたのが印象的であった。この建物がトルーマンの滞在した建物だと知らなければ通り過ぎてしまうだろう、だから知っておくことが大切なのだと。知らなければ、やはり引っ掛かりも生じず、問いが生まれず、もっと調べようと思ったりもできないのであろう。

こう考えてくると、問いは何もないところからは出てこず、それなりの知識がなければ生まれてこないように思われる。問いを持つことの大切さが強調されることはとてもよいことであるが、その反動で、「だから知識を覚えるのは意味がない」といった極論が出てくることのないように願いたい。創造性の話の時もそうであったが、「だから知識は必要ない」と簡単に行ってしまう人ほど、創造的な活動もしたことがなければ、本質的な問いを持ったこともないのではないだろうか。

【算数・数学教育におけるIAQに戻る】